

## 経営情報学会 2025 年全国研究発表大会

天笠道裕 (あまがさ みちひろ)  
北海学園大学経営学部

### 1. 2025 年研究発表大会の開催報告

2025 年 10 月 25 日および 26 日の 2 日間にわたり、北海学園大学において、経営情報学会 2025 年全国研究発表大会が開催されました。今大会は「BANI 時代における新たな価値創造」をテーマに掲げました。BANI とは、脆弱 (Brittle)、不安 (Anxious)、非線形 (Nonlinear)、不可解 (Incomprehensible) の頭文字を取った概念であり、現代の複雑な社会環境を象徴するものです。世界各地で紛争や戦争が続くなど、組織を取り巻く外部環境は、これまでに例を見ないほどの不確実性と複雑性を帯びています。本大会における議論が、こうした状況や、それに伴い生じる課題の理解と克服に貢献することを願い、このテーマを設定いたしました。

北海道での開催は、22 年ぶりでした。多くの研究者および実務家の皆様にご参加いただき、盛会のうちに終了することができたこと、大変嬉しく思います。ご多用のところ、北海道まで足をお運びいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

### 2. 大会の概要

開催日：2025 年 10 月 25 日 (土)、26 日 (日)  
開催地：北海学園大学豊平キャンパス  
大会参加者：222 名 (事前申込：192 名、当日申込：30 名、新規入会キャンペーン利用者 29 名)  
研究発表数 (申込)：110 件  
一般発表：41 件  
学生発表：24 件  
ポスター発表：26 件  
支部・研究部会：7 セッション・18 件  
協賛学会セッション：1 件

### 3. 研究発表の概要

今大会では、一般・学生セッション、ポスターセッション、ならびに研究部会・支部による特別セッションが設けられました。

#### (1) 学生発表・ポスターセッション

学生セッションでは、学部学生および大学院生による多様なテーマの研究発表が行われ、若手研究者ならではの新鮮な視点や意欲的な問題意識が示され、活発な議論が行われました。ポスターセッションでは、今後の発展が期待される研究発表が行われ、参加者が入れ替わりながらポスターの前に集い、活発な議論が交わされていたのが印象的でした。

#### ■学生優秀発表賞受賞者一覧

- ・酒井 和\*, 坂田顕庸, 高橋真吾 (早稲田大学)「ロールプレイングゲーミングシミュレーションに向けた市民行動イメージにおける重要属性の特定」
- ・小川 輝\* (東京科学大学), 大谷順司 (三菱電機), 後藤美香 (東京科学大学)「Malmquist 生産性指数を用いた日本の製造業企業における環境イニシアチブ参加の影響分析」
- ・鈴木 颯\*, 遊橋裕泰 (静岡大学大学院)「養豚農場における温湿度指数の影響分析と経営損失リスクの定量的評価」
- ・川辺琉善\*, 後藤裕介 (芝浦工業大学)「エージェントベースシミュレーションに基づく政策効果の説明可能化手法の設計」
- ・西村維方\*, 遊橋裕泰 (静岡大学大学院)「養豚業における発情再帰日数が経営収益に与える影響」
- ・田渕理斗\*, 高橋真吾 (早稲田大学)「ハイパーゲームによる搾取のモデル化と事例分析」

## (2) 一般発表セッション

一般発表セッションでは、情報、セキュリティ、AI、DXといった情報系分野のセッションに加え、マーケティング、組織、戦略などの経営分野に関するセッションが行われるなど、幅広い議論が、国内外の研究者の皆様により展開されました。

## (3) 研究部会・支部セッション

研究部会・支部のセッションでは、経営情報学会に設けられている7つの研究部会および支部がそれぞれ特別セッションを企画し、各分野における日頃の研究成果の報告が行われました。

あわせて、参加者との間で、多様な視点からの活発な意見交換や議論が展開され、研究の発展につながる有意義な場となりました。

## (4) 基調講演

今大会の基調講演には、株式会社HBA代表取締役執行役員社長の白幡一雄様にご登壇いただきました。白幡社長は、北海学園大学大学院経営学研究科を修了されており、本学と深いご縁をお持ちの実務家として、本大会の基調講演にお迎えいたしました。白幡社長は、2024年4月に同社の代表取締役執行役員社長に就任されて以来、北海道内の自治体や企業のDX推進をはじめ、北海道発のイノベーションを全国へと展開する取り組みを精力的に進めておられます。

### ■ご講演の概要

基調講演のテーマは「北海道から考える持続可能な未来」であり、北海道の地理的条件や人口動態、



基調講演の様子

産業構造、GDP、IT産業の動向といったデータをもとに、北海道経済の現状と可能性を示していただきました。北海道は、全国8位のGDP規模を有し、IT産業が着実に成長を続けていることから、北海道が地域経済として大きな潜在力を持つことが理解されました。

一方で、農業、水産業、観光業、製造業、流通業、自治体事業など各分野が、人材不足や高齢化、気候変動、物流の制約、DXの遅れといった課題に直面していることが示され、胆振東部地震や新型コロナウイルス感染症の経験を踏まえ、北海道が置かれる不確実性の高い環境に関する課題に挙げられました。

こうした課題に対して、スマート農業や酪農向けAI、ドローンやロボットによる設備点検、自動運転やオンデマンド交通、エネルギー管理、自治体のデジタル化、生成AIを活用した業務支援など、北海道の現場に即したIT・AI活用の事例が、自社の取り組みとともに紹介されました。さらに、回復力 (Resilience)、包摂性 (Inclusivity)、意味と即興性 (Meaning / Improvisation)、共感 (Empathy) といった視点から人と技術を結びつけながら持続的に価値を生み出していく道筋が示され、北海道発の新たな価値創造の可能性を伝える、基調講演となりました。

## (5) 特別講演

特別講演には、南カリフォルニア大学 ポール・S・アドラー教授をお迎えしました。アドラー先生は、経営学や経済学などの幅広いフィールドで活躍されており、「The 99% Economy」というご著書の日本語訳が出版されたタイミングでの来日となりました。今回の特別講演は、「The AI revolution in perspective」というテーマでご講演いただきました。

### ■ご講演の概要

講演ではまず、AIは突如として現れた「前例のない技術」ではなく、長年にわたるデジタル技術の進化の延長線上に位置づけられるものであり、過去の産業革命と同様の歴史的文脈の中で理解すべきであることが説明されました。組織のあり方や働き方に大きな変化をもたらしてきた、蒸気機関や鉄道、電力、自動車などの技術革命と同様に、AIもまた、



特別講演の様子

既存の経営モデルを揺さぶり、新たな管理や協働の形を生み出す可能性を秘めていることが改めて示されました。

その上で、AIの導入は、自動化やコスト削減を通じて労働を代替する方向に進む可能性がある便利な新技術であると期待されます。加えて、労働者の能力を拡張し、人とAIが協働する形で仕事の質を高める方向にも貢献します。アドラー先生は、AIの活用方法について、いずれの道筋が選択されるのかは、技術それ自体ではなく、企業の経営判断や政府の政策によって左右されることを強調されておりました。

さらに、過去の技術革命と同様に、AIをめぐる投資の過熱や社会的緊張が高まる不安定な時期があるとし、その先にどのような社会が形成されるかは、政府がどの程度積極的に関与し、市民や労働者をどのように意思決定に参加させるかに大きく左右されることが示されました。また、企業主導で技術が進む場合と、国家や社会が方向性を示しながら導く場合とでは、AIがもたらす結果が大きく異なり得ることも指摘されました。

講演の結びでは、AIは大きな可能性と同時にリスクも併せ持つ技術であり、その恩恵を社会全体に広げるためには、経営と公共政策の両面からの主体的な関与が不可欠であることが示されました。アドラー先生は、AIが一部の企業や投資家のみならず、働く人々や地域社会にとっても有益なものとなる道筋をいかに選び取るかが、今まさに問われていると述べ、AIと組織、人間との共存に対する、示唆に富む講演となりました。



大会開会挨拶を行う、北海道学園大学 森下宏美学長

#### (6) コーヒーブレイク

今大会では、基調講演の後にコーヒーブレイクの時間を設けました。少しでも北海道らしさを感じていただけたらと思い、北海道発の喫茶チェーンである宮越屋珈琲のコーヒーと、六花亭のマルセイバターサンドを提供いたしました。会場では、いくつかのグループに分かれて、議論や雑談に花が咲く様子が見られ、和やかな交流の時間となりました。

#### (7) 開会式

25日の午後に開催された開会式では、開会の挨拶として、今大会の大会委員長である北海道学園大学の森下宏美学長より、開式のご挨拶をいただきました。

その後、本年度より経営情報学会会長に就任された早稲田大学の高橋真吾先生よりご挨拶があり、あわせて学会賞を受賞された井上直幸先生（筑波大学大学院）、木野泰伸先生（筑波大学）、倉橋節也先生（筑波大学）、ならびに昨大会の功労賞を受賞された清宮徹先生（西南学院大学）と四本雅人先生（長崎県立大学）への表彰が行われました。

## 4. おわりに

以上のように、今大会では、多様な分野と世代の研究者が一堂に会し、経営情報に関する研究の広が

りと今後の発展可能性を実感させる、充実した研究発表の場となりました。

来年度の研究発表大会においても、さらなる議論の深化と新たな研究成果の発表がなされることを期

待しております。

ご参加いただいた皆様ならびに発表者、運営に関わってくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。